

宗教者側の実践活動から見えてくる 東日本大震災後の宗教的課題

代表者・コメンテータ 新免 貢

司会 長谷川（間瀬）恵美

魂への配慮——被災地校教育支援の現場から——

長谷川（間瀬）恵美

私は「宗教者側の実践活動から見えてくる東日本大震災後の宗教的課題」のパネリストの一人として参加した。

二〇一一年三月十一日の震災後、私は微力ながら被災地の岩手県釜石市唐丹小学校、中学校の教育支援活動に携わっている。唐丹町は人口二一〇〇人、九五六世帯の漁村である。未曾有の大津波により、高さ一二・五メートルの堤防が破壊され、住民の家の三分の一が全・半壊、死亡・行方不明者二十二名、唐丹駅は水没、海辺に位置した市立唐丹小学校は全壊、唐丹中学校の校舎も水没した。

震災直後、子供たちが死を目の前にして、何を、どのように受け止めたのか、彼・彼女らに届く「魂への配慮」（スピリチュアル・ケア）を実践的な課題として、日本における宗教の役割を明らかにしたいと考えた。しかし、訪問時、その場に居合わせた子供たちは、笑うことがなかった。突如として「どーん」と地下から突き上げるように襲った余震にも子供たちは冷静に対処していたのが印象的だった。被災を経験した子供たちの心身に刻まれたスピリチュアル・ペイン（魂の痛み・トラウマ）

に寄り添うことの困難を感じた。実際に子供たちに接すると、教学的知識からではなく、全身から子供たちに届く課題共有的な「魂への配慮」の必要性をひしひしと感じた。

宗教の役割は、人々が日々安寧ならしめる泰平道を保つことにある。それは社会維持機能と社会変革機能にある。私たちは今回の震災で、生活基盤と生命基盤をことごとく破壊された。今まで安心して飲んでいた水、食べていた野菜や果物、お米などの産地を確認しながら購入し、子供たちに与えている。見えない、匂わない、不気味な放射線の脅威に、恐怖感を募らせている。被災地の子供たちはデータに換算できないほどのたくさんの恐怖を体験した。地震の恐ろしさ、津波の恐ろしさ、原発の恐ろしさ、たくさんの「死」。身近に見て、嗅いで触れて感じた残酷な「死」は簡単に受け止められるものではない。気持ちの整理がつくまでには長い時間がかかる。宗教が果たせる役割があるとしたら、それは契約や業績原理、データに基づく社会的役割ではなく、それ以上に個人の内面の心の救済、魂への配慮である。個人に寄り添い、個人の心を心として、その傷ついた魂への配慮をすることこそが宗教の社会貢献であろう。

人の魂に配慮し、生命に向き合い、共感的に関わることができるのは、宗教である。被災地校教育支援の現場では、友人のキャロル・サック宣教師とともに音楽（パストラル・ハープ）と祈りを通して、子供たちの痛みと悲しみに寄り添うスピリチュアル・ケア（癒しの取り組み）を実施している。宗教者として、子供たちの精神的復興を願い、祈りの時間と場を共有すること、忍耐と希望の大切さを訴えている。

祈りは、宗教に重要な実践行動の一つである。被災地を案じ続け、被災された人々の苦しみを忘れないこと、見捨てないこと、憶え続けること、そして「共に」祈ることは希望を共有することであり、それは社会変革の原動力になる。隣人（となりびと）への苦しみ・痛みに共感し、手をつなぐこと、それは「絆」が結ばれる社会維持機能の希望となり、「魂への配慮―スピリチュアル・ケア」の第一歩となっていると私は考えている。

被災者支援において、〈仏教的〉であるとはどういうことか？

坂井 祐円

東日本大震災では、宗教者による被災者への支援活動がこれまで以上に注目されている。とりわけ伝統仏教教団による組織的な活動には目を見張るものがあり、宗派を超えた連帯も生まれている。

震災から一年が経過して被災地へ赴いた筆者は、伝統仏教教団に属する幾人かの僧侶の話を聞く機会を得た。その中で、「避難所で喘ぐ被災者を見たとき、僧侶である前に一人の人間として支援せざるを得なかった」という言葉に立ち止まった。この言葉からは、被災者への支援はあくまで〈人間的〉な行為であって、〈仏教的〉な信念のもとに行ったわけではない、というニュアンスが感じられたからである。

一方、別の伝統仏教教団に属するグループは、被災者の「死者の冥福のために供養してほしい」というニーズに応えるべく、「読経ボランティア」の活動を行った。この活動はマスメディアからいかにも〈仏教的〉な支援として報道され、注目を

集めた。僧侶もまた、この活動が〈仏教的〉であることに誇りをもっていた。

果たして、被災者の支援活動に〈人間的〉と〈仏教的〉との違いはあるのだろうか。違いがあるとすればそれは何だろうか。また、〈仏教的〉であるとは、活動のあり方を指すのだろうか、それとも信念や教義の問題なのだろうか。

ここで思い起こされるエピソードがある。それは、浄土真宗の祖と仰がれる親鸞（一一七三―一二六二）が、越後流罪を赦されて家族とともに関東に向かう途中で、洪水と飢饉に見舞われていた佐貫の地（現在の群馬県邑楽郡）に滞在した折に、衆生利益のために三部経を千回読誦しようと決意して始めたが、数日後、その読誦を中断してしまった（『恵信尼消息』）、という出来事である。

おそらく親鸞は、人々の悲惨な現実を目の当たりにして、自分に何かできることはないか、人々を苦しみから救う手立てはないかという思いにつき動かされ、經典を読誦しようとする決意に至ったのであろう。これはヒューマニズムの発露であり、言わば〈人間的〉な情念に従ってなされた支援行動にはかならない。

しかしながら、親鸞はこの經典読誦を止めてしまう。その理由は、「名号のほかには何事の不足にて、必ず経を読まんとするや、と思ひ返して」と記されている。人間が救われるためには、念仏を称えるほかにいかなる行為も必要ない。人間を救うのはあくまで阿弥陀仏であって、人間ではない。人間は自力を捨てて、阿弥陀仏の本願力を信じてすべてを委ねる他力の境地